

4. 「母の実家を拠点に新規参入」

青木 良彰（平成 20 年度 農学科卒）

就農年 平成21年

就農地 茨城県水戸市

主な作物 米、大豆、そば

【高校 2 年生の時に就農を決意し農大に進学】

青木君は、ひたちなか市の兼業農家の次男として生まれました。子供の時から農業が好きでしたが、次男ということもあり、機械関係にも興味があったことから工業高校に進学しました。そんな青木君に高校 2 年生の時、転機が訪れました。水戸市内原で農業を営んでいた母方の祖父が亡くなり、わずかな水田と畑があとに残されたのです。祖父が永年にわたり丹精を込めて耕し、青木君も幼い頃から慣れ親しんだ祖父の家の田畑が、このまま荒れ果ててしまうのなら、農業が好きな自分が祖父の意志を引継ぎ、どこまでやれるか判らないけれど将来ここで農業をやろうと決心し、高校卒業後は迷わず茨城県立農大に進学しました。



お気に入りのトラクターに乗った青木君。

工業高校出身と言うこともあり、大型機械を駆使して大ほ場を耕作する、大規模普通作経営にあこがれました。農大では水田コースを選択し、栽培技術を基礎から学ぶと共に、農業機械のメンテナンス技術も積極的に身につけました。プロジェクト学習ではコンバインのキャタピラに動力噴霧器を取り付け、傾斜地でも薬剤散布が出来るオリジナルの機械を作製するなど、毎日工作室で油にまみれて充実した日々を過ごしました。

【実習助手として勤務しながら就農を準備】

卒業後は機械メンテナンスの腕を見込まれ、農大の実習助手として 1 年間勤務し、後輩達の実習指導や各コースの機械の修理や手入れに活躍しました。休日は祖父の遺した内原の農地に作物を作付けするとともに、農地を探して近隣をまわり、借りることが出来た農地にも麦を播き就農準備を進め、実習助手を退職すると同時に内原の亡き祖父の家を拠点として 40 畝の経営規模から専業農家としてスタートを切りました。毎年コツコツと借地により耕作面積を増やし、就農 7 年目の現在では水稲 18 畝、畑作物 21 畝（大豆、そば）の普通作経営を営んでいます。

【ロコミで耕作依頼が増加し 7 年で 100 倍に】

規模拡大を図るにも、就農当初は地域で顔も名前も知られていなかったもので、まず荒れている栗畑に着目しました。内原地区ではかつて養蚕が盛んに行われていましたが、時代の流れと共に衰退し、

桑畑のあとはその多くが栗畑に転換されたものの、手入れが行き届かずに荒れている状態が目立っていました。青木君は荒れた栗畑を見かけると、飛び込みで地主に借地の交渉をし、抜根のうえ整地することを条件として2畝の栗畑を借り、農閑期に重機で農地を次々と蘇らせていきました。

青木君が農地を再生し、丁寧に耕作しているのを見て、その後は毎年のように荒れた畑の耕作依頼が舞い込むようになりました。さらに「水田も借りてくれないか？」と徐々に水田の耕作面積も増えていき、現在では田畑合計 39 畝を耕作しており、就農当初の 100 倍近くまで面積が増えています。

【農業機械を低コストで導入】

これだけの面積を耕作しながら、現在にいたるまで、制度資金等の借入れはゼロ。コツコツと農産物の売り上げを貯めて、知り合いの農家の中古品や、農機具屋の片隅でホコリをかぶって利用されていない農機を無償もしくは破格値で譲ってもらい、メンテナンスの技術をフルに活かして使用できる状態にし、普通作経営でウェイトの大きい、大型機械の修繕費や減価償却費を抑えています。トラクターは大小併せて7台を保有しており、アタッチメント交換の手間や修繕時間のカットなど、少ない労力の中での適期適作業が可能な体制となっています。労働力は青木君に加え、農繁期には農大時代の同級生で親友の高野君（かすみがうら市：高野農場経営）を雇用し、協力してもらっています。

【契約栽培を中心に】

米は地元の集荷業者にその年の相場で出荷していますが、大豆は納豆メーカーとの契約で地域在来の納豆用稀少品種を栽培しているほか、ソバは全国的に評価の高い「常陸秋そば」を地域の製粉会社と契約栽培を行っています。このように契約栽培を主体とすることで、一定の品質の作物を安定的に生産・供給することにエネルギーを集中でき、年々生産技術は向上しています。



農場の周りは日本の原風景のような農村です。

【農業大学校で得たもの】

農業大学校で得たものは、栽培技術や機械メンテナンスの技術もさることながら、人との出会い、繋がりと青木君は言います。農家派遣実習でお世話になった農場経営者からは、中古農機を安く譲り受けたり、作物の有利な販売先を紹介してもらったりして、経営が上向くように随分と助けてもらっているそうです。また、同級生の高野君とは、在学中にお互いの将来の夢について時間を忘れて語り合った、何でも相談できる友人で、農繁期には協力しあう、現在の経営に無くてはならないビジネスパートナーです。農業大学校で学ぶ後輩達も、人との出会いを大切にして日々の勉強に実習に励んでもらいたいとのことでした。農業経営者の高齢化が進む中、若く力にあふれた青木君の益々の活躍が期待されます。